The Kōbe Marine Observatory
JOURNAL OF OCEANOGRAPHY
2nd Series Vol. 6 No. 6

海　洋　時　報

第2輯　第6巻　第6號
昭和30年　11月

目　次

神　戸　海　洋　氣　象　臺

11月の北太平洋及び其他大洋の氣象

Outlines of the Meteorological Conditions in the North Pacific Ocean and other Oceans.

§1　概況と高、低気圧の大勢

南半球上では気圧分布の大勢は前月とほゞ同様ですが、北半球上では大陸上の高気圧と極をはさんで存在する北大西洋と Aleutian 両低気圧は夫々発達して全般的に大気の運動は活潑化して来ます。

高気圧

北半球上では 亜欧大陸に またがる 高気圧 が 1030mb となり亜欧大陸は殆んどその傘下にあります。北米、北亜大陸も 1020mb の中心を持つた高気圧で蔽はれるに至ります。

南半球上では前月と大差なく 30° S 緯度線に沿つて帯状の高気圧が環状に存在し1020～1023mbの中心示度を示しています。

低気圧

Aleutian 低気圧は月平均中心示度1000mbと下り区域も更に拡がります。**北大西洋の低気圧**も強勢となり 1005mb の平均示度を示すにいたります。このように高低気圧共に発達して気圧傾度が急峻となつて来るため全般に風は強吹して来ます。

§2　熱帯低気圧

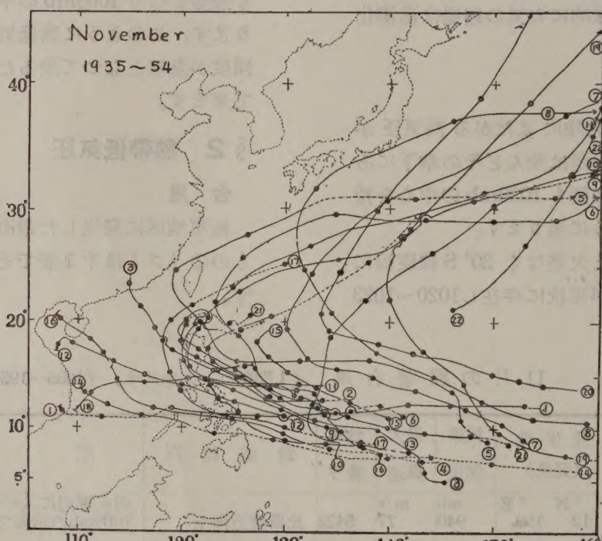
台　風

極東地区に発生した最近20ケ年間内の顕著なもののリストは才１表でそのコースは才１図です。

才 1 表　　11 月 の 顕 著 台 風　(1図にコースを示す)　(1935—1954)

番号	発生又は発見と終末日付 11月 年	月	日	発生地（発見）°N	°E	最深気圧 mb	最大風速 m/s	台風番号	最盛位置	記事
1	29	24	XII 2	12	150	940	77	5422	比島東方洋上	南支那海に入つて勢力の復元なく、1000mbの示度であつた。
2	〃	13	21	13	136	925	77	5421	Leyte東方400粁	呂守島17—18日台風圏内に入る。
3	〃	3	12	5	145	937	78	20	Samar島NE200粁	香港の東で南華上陸
4	28	11	20	7	145	960		5320	Luzon島北部	20日低気圧となる。
5	27	7	17	8	150	915	45	5221	Luzon島東1000粁	15日低気圧となる。
6	25	2	16	11	141	940	45α	5040	Luzon島東方	宮古島S39、名瀬 NNE 32米/秒
7	24	14	26	8	154	960	50α	4922	ラサ島—鳥島	鳥島 S 43、三宅島 NNE 34、八丈島 NNE 32米/秒
8	23	12	22	11	160	955	40	4834	ラサ島	銚子 N 30、潮岬 ENE 22米/秒
9	22	13	23	10	135	980		4720		宮古島 N 32米/秒
10	21	16	21	8	135	970		4625	硫黄島以東	
11	19	8	15	14	133	970		4423	南西諸島	那覇 N 35米/秒
12	17	11	16	11	130	980		4229	Paracel島	Paracel SE 風力 12

13	14	28	XII 6	8	142	975			Samar 島	Samar 島各地風力 10~12
14	13	15	27	Marshall		980			南支那海	函館丸 NE 8；13°N 114°E
15	〃	10	15	11	140				Luzon島東方	日栄丸 N 9；16°N、126°E
16	〃	1	15	7	140	955			南支那海	勦賀丸 E 12、956mb；16°N、113°E
17	12	15	23	8	137	955			Visayas群島	Leyte島 Ormoc 956mb Visayas 群島各地風力 12
18	〃	9	13	13	131	960				Infanta 風力 12（NW→S）960mb、Manila SW 29米/秒（1時間平均）
19	11	16	24	7	160	970		3608	父島附近	S.S.Michigan SW 12；30°N、146°E
20	〃	2	13	14	155以東	970				父島 S 27米/秒 S.S.Thistlebrae NE 12、980mb；14°N、155°E
21	〃	9	21	8	152	955		3513	Luzon島東方	S.S.Lossiebank ESE~SSE 12、957mb;14°N、128°E 水戸丸 E 11; 17°N、126°E
22	11	1	8	21	146	970			35°N、160°E	箱根山丸 WSW 11;34°N、158°E 北海丸 NE 11; 46° N. 175° E



第 1 図　　11月の顕著な台風経路図　　……… 1000mb以上の中心示度

才2図は前号迄と同じく最近15ケ年内の経緯各5°梯形内通過台風の回数であります。

11月になると転向する位置は更に南方になり20°N 辺を境にして北方ではNE進、南では西北西進の傾向が顕著に出ています。

進行速度

転向点以南の低緯度では一般に低速で、特に転向点附近に近い15°~20°Nでは遅く 20km/h 以下となつています。NEへ転向してからの速さは大きくなるので、本月のものは 25°Nから30°Nの区域でも既に 35~47km/h の比較的大きい速さとなる点盛夏の台風や初秋のものと著しい差があります。30°N 以北での速さの増加は前月程顕著ではありませんで50~60km/h といつた所であります。

11月台風の特徴

(1) 発生地点が低緯度となり、南洋群島海域のものが多くなります。(2) 但し、発生数は可なり少なくなります。(3) 併し、強さは必ずしも盛夏、初秋のものに比し弱勢とはいえませ

ん。(4) 北東への転向点が低緯度となり、通過区域は全般に低緯度で比島とその東方海域通過が特に目立つて来ます。

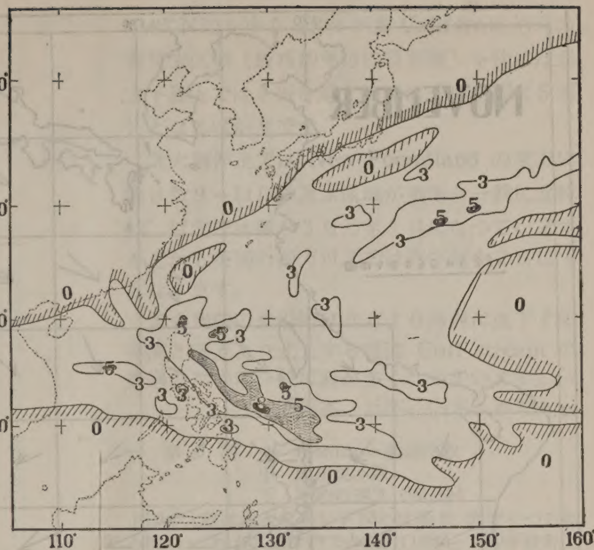
Cyclone

Bengal湾、Arabia海のCycloneは前月に引続き多くなつています。Gallé 及び B. N. Desai 氏より引用した既往のCycloneの経路は才5図で太線は優勢なものを示しています。

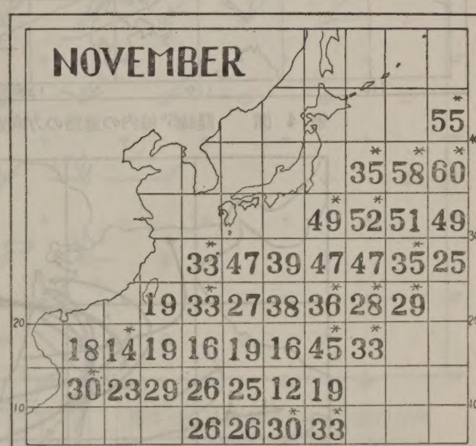
強さは10月と共に年を通じて最も強烈なものが出現します。（但し出現の絶体数は台風に比べると余程少ない事は既出の示す通りです。）

Hurricane（Mexico西方沖の）

1910—40年の31ケ年内に3ケ発生している程度で先ずこの Hurricane の活動は前月で一応終つたものと見て正しいでしょう。



第 2 図　極東地区の台風通過回数 (1940—54)



第 3 図　11月台風の平均速度 (km/h) *印 1～2回の平均

北大西洋の Hurricane

11月には発生は急に減り10ケ年に4個の割合となります。発生位置は才6図中図に示すように Cuba 島の南方と Lesser Artilles の北方とであります。通過地域は東へよつて Cuba 島からその北東洋上となり Florida 半島を除けば北米合衆国はぐつと少なくなつて来ます。平均進行の速さは才6図下図に示す如く Cuba 島から北東の沿海に特に低速の所があるのは一寸目立つた特徴となつています。

進行方向が変る所謂転向点は年間最も南下して、Cuba 島の南では 17°～20° N 位迄南下し Mexico 湾で22°～24° N位、Cuba 島以東では 20°～28° N位となつています。

進行方向の各5°梯形内での百分率は才7図に示す所で御参照下さい。

Kona Storm

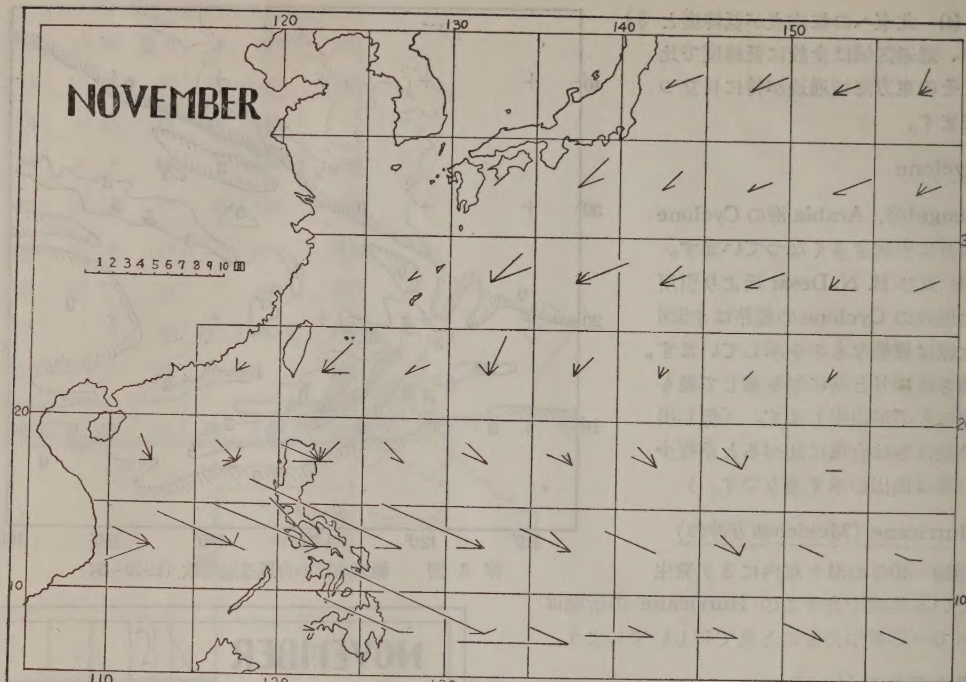
北太平洋の中央部以東の布哇群島附近を中心として発生する一種の熱帯性低気圧がありこれを Kona Storm と呼んでいます。発生、構造及びその運動は台風とは著しく異なつたものがあります。

これについては別稿に Kona Stormなる題目で詳述してありますので御参照下さい。(6頁)

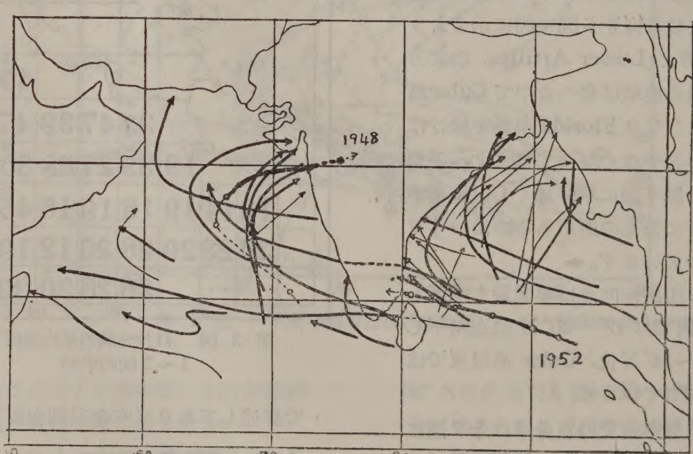
§3　非熱帯低気圧

本邦附近の低気圧

1951～1954年の11月に本邦附近を通過した低気圧（但し少数の台風を含む）の5°梯形内通過数の図は才8図でありまして本邦の沿海からその東方200浬にかけ、Aleutian に延びる区域に特に多い点に注意を要します。11月に入ると Siberia 大陸の高気圧は前月より更に発達し、



第 4 図　　経緯5°毎内の進路の方向別回数（回数は図の左上に物指しがある）



第 5 図　　11月 Bengal 及び Arabia 海の Cyclone の経路（P.H.Gallé 及び B.N.Desai）

一方北太平洋高気圧は可成りの衰えを見せ、冬型の気圧配置となります。低気圧の発生回数も増し、Kamchatka、Aleutian 列島方面には著しい発達をした低気圧も姿を見せ始め、北海道を始め本邦東方洋上では低気圧の去来に注意が肝要な時期となり出します。

Aleutian の低気圧は気候図には大きな範囲のもののようでありますが、詳細に見れば複雑な構造をしていて仲々解き難き謎を含んで居りますので、これは改めて次号で詳述します。

§4 霧

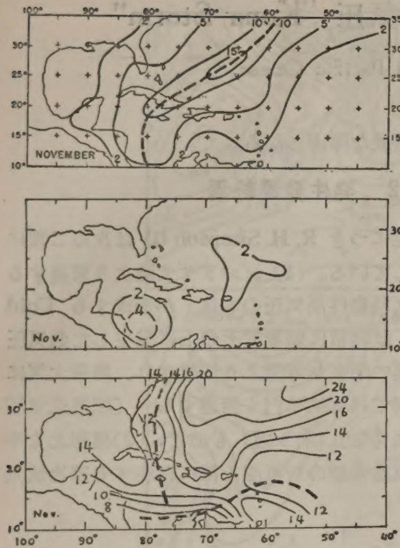
霧は前月より更に減少しています、即ち北米

の40°N辺を中心とする所謂 California 沿海の霧発生区域（最高10%の出現頻度）を除けば北太平洋上では5%を越す海域は千島中部（5%）となるばかりです。

北大西洋上では New Foundland の東方に霧日数9～11日に及ぶ区域が猶あり一般に北緯42°以北では霧が3日乃至7日になつていますがしかし英国の西方以北では再び減少2日以下となります。

米合衆国の東沿海は北方より南西に流下する寒流と南方より北上する暖流 Gulf stream の遭遇のために一般に霧が多くなつています。

（宮本、三宅、山本、西野）

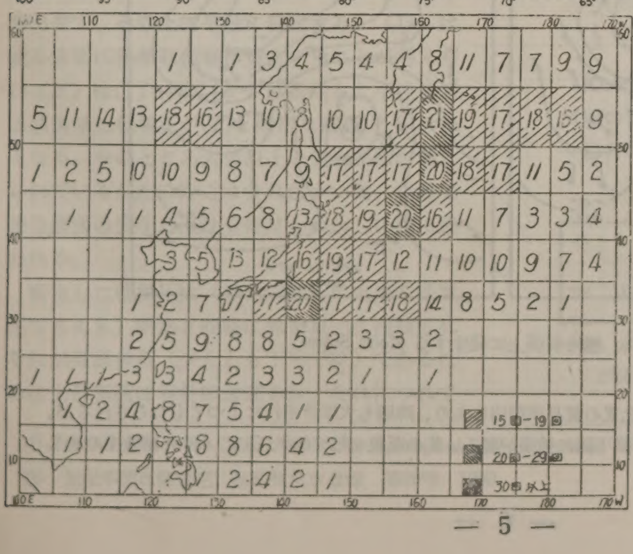


← 第6図　上　Hurricane 通過回数
　　　　　中　同出現回数
　　　　　下　平均の速さ（哩/時）

上図の太線は最大通過を下図のは最低速度をつらねる線：いづれも5°梯形内での統計(1887—1950年統計)



第7図　11月 Hurricane の進行方向別頻度分布（%）図の左上に%を計る同心円があります（Colón）



←第8図　11月低気圧通過数（4ケ年総数）

北太平洋東部における亜熱帯性低気圧 "Kona Storm"

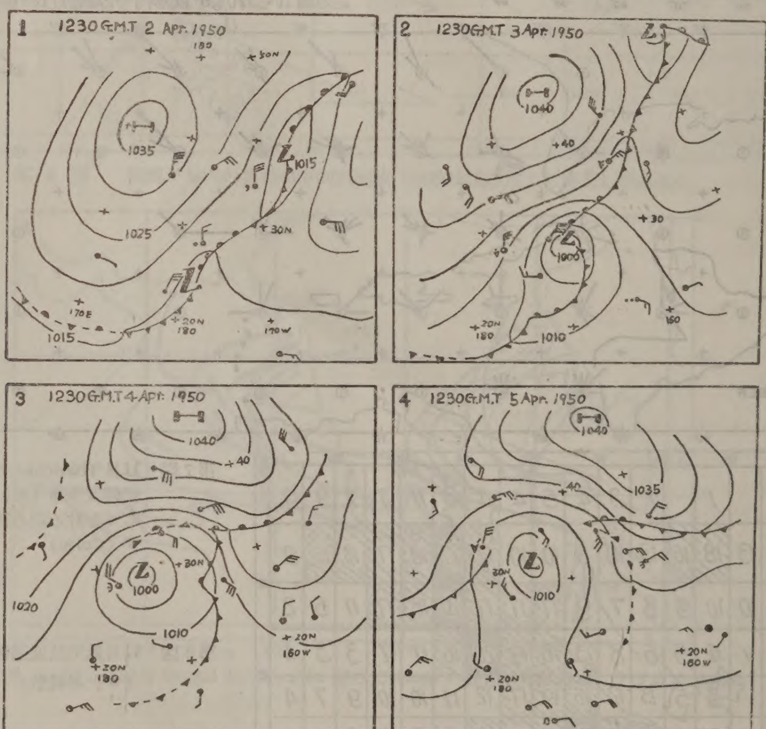
On the "Kona Storms" in the North Pacific Ocean.

§1 緒　　言

東部太平洋の熱帯低気圧には、中米西岸洋上に少数の Hurricane が存在するのみであるがその他にハワイ附近に亜熱帯低気圧 "Kona Storm" が発生する。これは熱帯低気圧に準ずる対称的円形循環と、中心附近の可成広い弱風域を持ち不規則な進行運動をし異状な強風域と降雨によつて顕著な特長を示し、他の高緯度の寒冷低気圧や東亜地方の台風と区別することが出来るもので、此の為に北太平洋の航海者にとつて可成な障害となる。

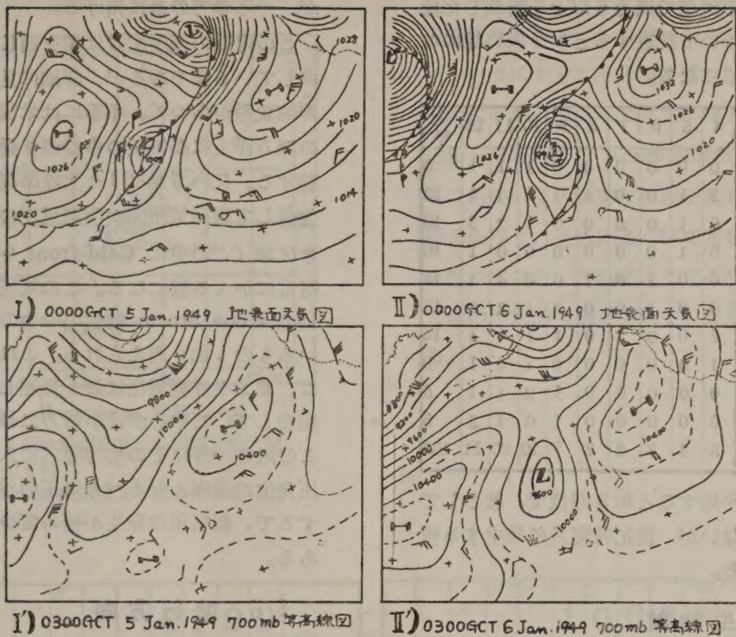
§2 発生発達終焉

発生につき R. H. Simpson (1) は次の二種に分類している。(1) シベリヤ大陸より東進する寒気（移動性高気圧の本体）が形成する Cold front は非常に顕著でその上に発生した低気圧は急速に閉塞し寒気より切離され、熱帯大気に包まれて対称的に円く発達する〔閉塞低気圧からの発生〕（オ１図）ものと、(2)東部北太平洋の亜熱帯部の対流圏上部に存在する寒冷低気



第 1 図　　寒冷前線上に発生する Kona Storm

註） Kona Storm ハワイ本島附近は通常北東の貿易風圏内にあり、降雨も大部分それによつてもたらされるが、時によつては南又は南西の強風が起り、風下側に強雨が起る。此の現象を起す低気圧に、ハワイ諸島中の地名を冠して Kona Storm と呼んでいる。



第 2 図　対流圏上部の寒冷低気圧に誘発される Kona Storm

圧が地上での Kona Storm の発生の核となるもの。（才２図）

又堀口、久保氏(2)はかつて次の如く述べている。（1930）（1′）ハワイの南より来るものは或は熱帯性のものかも知れないが（2′）その他の大部分はアリユーシャン群島附近にある低気圧の不連続線中に出来る副低気圧で（3′）稀には西方より高気圧が移動して来る際に不連続線が出来て、その上に単独に発生する。（1′）は或る季節に熱帯収斂帯に発生することが考えられ（2′）は(1)と同じ(3′）は発生した不連続線上に出来た低気圧が(2)と同様な経過で Storm となる。今のところ大体以上の発生原因が考えられているが此の附近は資料が少い為、正確な発生原因の究明乃至は分類はむつかしい様に思われる。

発生した低気圧は（寒冷前線上に出来る低気圧でさえも）閉塞と同時に熱帯気団に囲繞されそれが高温多湿（少くとも下層では）であるために上昇気流は容易に加速され、それにつれて収斂も激しくなつて、周囲に強風帯、中心のやゝ外側に強い雨域を持つ様になる。

発達した Storm の最後の段階は、その大部分は途中で衰弱して消えてゆくが、衰弱の途中で中緯度低気圧として再びよみがえるもの、及び Storm の或るものは発達して本物の熱帯低気圧の 性格を 持つようになるものも あるらしい。

§ 3　発生の季節

Kona Stormの発生期は主として北太平洋高気圧の衰弱期に当り、その約90％は１～４・９～12月の間に発生する。（才１表）

才１表　　月別発生頻度表（1931～1940）

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
回	10	11	13	10	3	3	—	1	3	9	17	5	85

註）本表は２日以上北太平洋天気図上にその存在が確認されたものについて統計した。

(1) Evoluation of the "Kona Storm, A Sbutropical cyclone. Journal of Meteorology. Vol. 9 Number 1, 1952

(2) 北太平洋の低気圧、海洋気象台彙報　第26号　1930

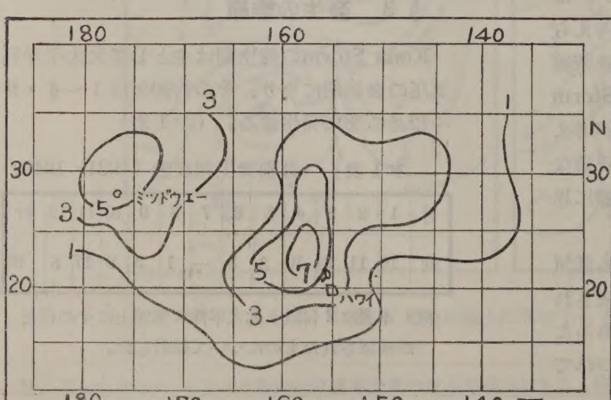
念の為、此の地域で風力6以上を観測した総ての低気圧について計数すると才2表の様になり、傾向は同じになる。

年＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
1940	6	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	9
1939	0	2	3	2	1	0	0	1	1	1	1	1	13
1938	1	0	3	0	1	0	0	0	0	1	2	3	10
1937	3	4	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	10
1936	2	2	1	0	0	1	0	1	0	2	4	1	14
1935	1	2	3	0	0	1	0	0	3	1	2	0	13
1934	0	1	2	2	0	0	2	0	1	1	4	1	14
1933	1	0	1	1	0	0	0	0	0	1	4	1	9
1932	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	1	6
1931	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	5
合計	15	12	14	5	3	2	2	2	7	10	20	11	103

発生回数は平均すると年8回位で、数としてはあまり多くないが、前記特定月に集中する傾向が明瞭である。

§4 発生地域

Kona Stormの性質から言つても、又資料の密度から言つてもその発生地を決定することはむつかしい場合が多い。それで天気図に始めて現われた位置を以てそれに代え、10月より3月迄の寒候期について、緯経度夫々5度平方区域毎に発生した全低気圧の数を図示すると才3図の様になる。 Midway と布哇附近が多く出ているが、これは両島にある常在の観測所からの資料が入手出来るために生ずる見掛のものがあると思われるので若干割引いて見る必要があるが、一応参考の為に掲げる。



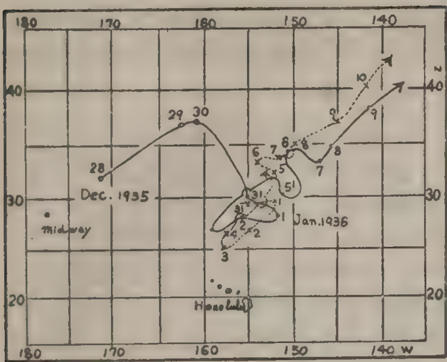
第 3 図　　Kona Storm 発生回数

この附近の気圧配置は年を通じて高圧帯を形成している様であるが、詳細に見ると可成な季節的変動があつて、冬季には米国西岸か又はその西方洋上に高気圧の中心が移動し、勢力も衰弱する。又一方シベリヤ大陸の高気圧は東方に伸張して両高気圧間の所謂気圧の谷ともいうべき区域（この中に Cold front を含む）がこの附近にかゝる様になる。この気圧の谷がこの附近の Kona Storm 発生の一つの温床となつているものゝ如く考えられる。これに反し夏季には、北太平洋高気圧は最も発達し、冬季東方に偏在していた中心が遙か西方に移動して来て、この附近一帯にその勢力圏内に入るため、低気圧発生の温床となるべき気圧の谷の解消を引起するで、低気圧の発生が極めて少くなるものである。

§5 進行方向

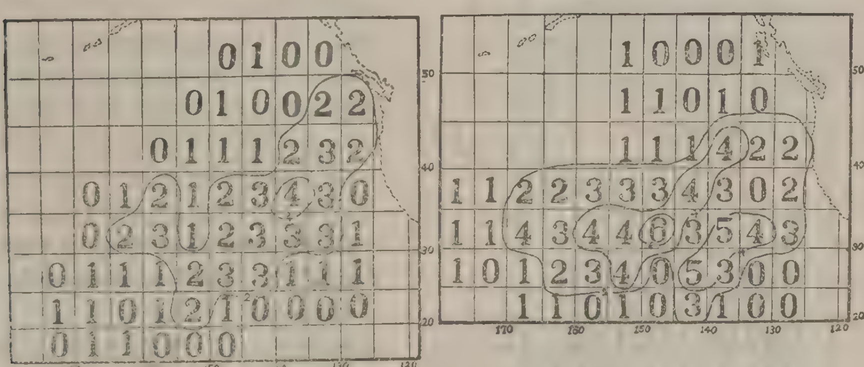
進行方向は不規則で、周囲を取巻く高気圧の間で敏感な平衡を保つて位置しているので、それ等の消長によつて如何なる方向にも容易に移動し、時間々隔の大きい天気図では到底その真の運動を見極めることは出来ず、特に資料の少い場所では初期の Storm は途中で見失う恐れさえある。此処に例として掲げる才4図は1936年1月より2月に至る。経路図で北太平洋天気図（神戸海洋気象台）の24時間毎の解析によるものと、（図中点線）筆者が当台保存の船舶気象報告により、6時間毎の注意深い解析によるもの(図中実線)とを比較したもので、これだけの違いが出て来る。此の経路図の示す複雑な運動の蛇行性は迷走台風の比ではなく、進行速度も異状で、停滞から急速な移動へ、又停滞へと、極く短時間の間に速度の変化が起る様に見える。（実際に一つの Storm が此の様な運動をするかどうか、疑問の点もあるがこゝでは暫く同一Stormが連続的に動くものとしての結論である）此の様な不規則運動は予報の可能域外にあり、Kona Stormの危険性の

一つは此の性質に起因するとも言えよう。

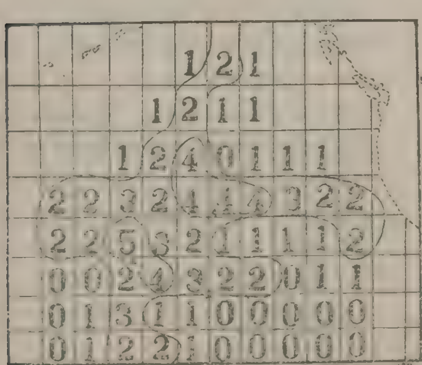


第4図　Kona Storm 経路の一例
実線が1日4回の観測を基にし作成した天気図より求めたもの
点線は一日一回の天気図より求めたもの（北太平洋天気図による）

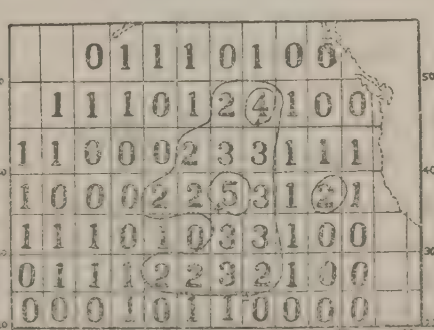
以上の様な訳で Storm の経路図は従来の天気図より見取つたものでは不十分で、Storm の一つ一つに十分な吟味が必要となり非常な労力を要するが、取敢えず北太平洋天気図（1931～1940）に現われた Kona Storm と認められるものについて大略的な検討を加えて修正した経路図を作り、それに基づいて月別の通過頻度図を作つてみた。これによつて不規則とはいえ、大体の平均的な進行方向を、見取り得る様である。



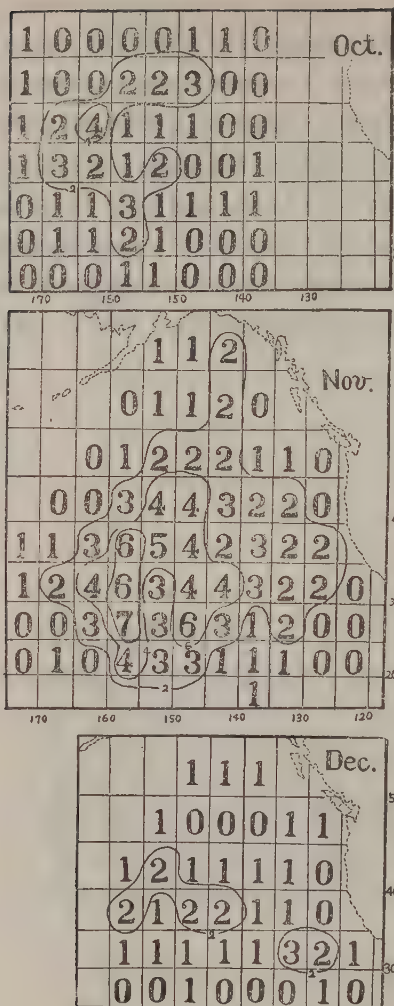
第5図甲　1、2月　Kona Storm 通過頻度図（1931～40）



第5図乙　3、4月



仝上



第 5 図 丙　10～12月
Kona Storm の通過頻度図（1931～40）

§6　Kona Storm の強さ（風、雨、中心気圧）

Kona Storm の形態は、中心附近に約100哩にも及ぶ気圧緩降域・弱風域（台風の眼と同一視は出来ない）を有し、それより可成離れた外側の熱帯気塊との境界面附近（周囲の高気圧との接触面）に気圧勾配の急峻な部分が存在し、強風を起す。

適当な例ではないが、Stormの形状は昭和29年の12号台風の構造や Aleutian 附近で見かけられる大低気圧と一見風力分布が似ている。

§.6.1　風

風の強さは強風帯の出来方如何によつて定まり、必ずしも中心気圧の 高低に よらず、弱い Stormの場合でも或る地域では猛烈な風が吹くこともある。しかし原因が此の様なものであるので、風速は台風の様にその発達程度に比例して増加することはなくせいぜい 25m/s （風力10～11）止まりであり、中心に近づく程風速が強まることはない。

才6図に示す1935年1月始めの Kona Storm は典型的なものとして、当時米国の Monthly Weather Review にも記事が載せられているが、その Storm の中を横切つた川崎汽船株式会社の Montreal 丸（船長今泉大六、航海士森雅夫）の6時間毎の観測がある。（才7図）Stormの移動に伴う汽船の中心に対する各時間の関係位置は同図に示してある。船は南東象限から入つて中心のやゝ北を通り、北西象限に抜けているが、その中に、中心附近の弱風を始めとして風力分布のもようがよく現われている。**一般に最強風速の起るのは中心より数百粁離れた東側で次いで西側にも強風帯がある。**才8図は Kona Storm の風力分布のモデルで、等風速線の数字は、最大風速よりの差を表わしている。

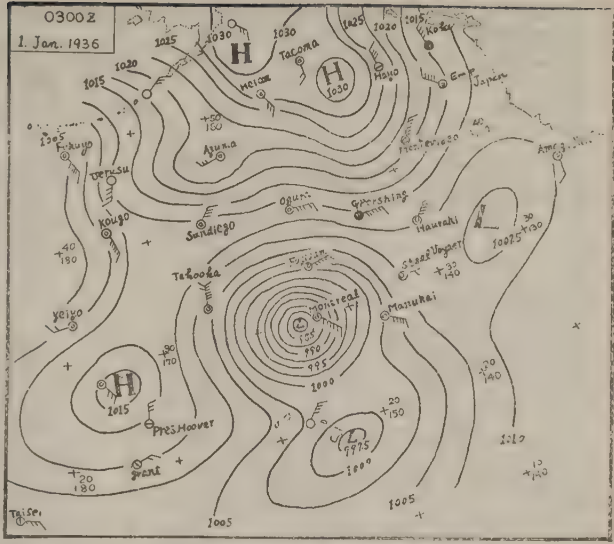
§.6.2　雨

主な雨域は前記強風帯で起る。此の附近は顕著な収斂が起つて上昇気流を促し、潜熱の放出によつて気層は不安定化し、不安定性の雲（積乱雲・積雲）が発生する。この為降雨は主に驟雨性の強雨で強風帯附近に集中する。才7図の Montreal の観測によつてみてもスコール性の雨が連続して異様な感を抱かせるが、雲の切間は多い様である。才9図は降雨分布図のモデルで才8図と同様 Simpson の論文中より引用したもので最大雨量よりの偏差で表わしてある。

§.6.3　中心気圧

Kona Storm の中心気圧は日本附近の中緯度

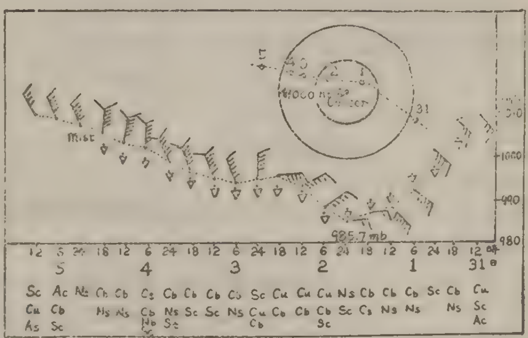
低気圧と大体同程度のものが多い。即ち1000mbより1010mbのものが大部分を占める。1931年より1940年迄の間に発生したものについてみると才6図にあげたものが最大級の一つで此の時の中心気圧は985mb（推定）此の時の実測値の最低は985.7mb（汽船 Montreal 丸）であつた。大体 985mb 位が最低気圧と考えられる。先にも述べた様に Storm の構造上気圧の深浅が必ずしも風速と一致しないので、中心気圧の高低は台風や低気圧の場合と異なつて、その強さを推定する場合むしろ二義的なものとなると言つてよいであろう。



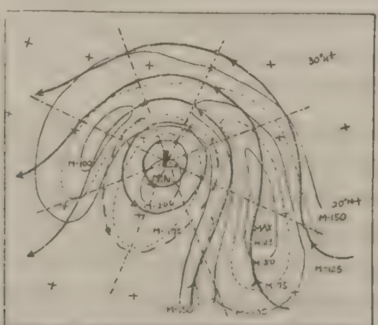
第 6 図　0300Z 1. Jan. 1936

§7 後　　記

以上表題について概述して来たが、此の Storm に関しては資料の不足も災してまだ多くの今後に残された問題がある様に思われる。才8図の典型的な例に比べて、才10図は幾つかの分裂した中心を持つ特異な例で、便宜上図中の Storm を北より A.B.C.D.と名付けると此の場合一般に各 Storm の強度は弱いが、個々の動勢は複雑で、Aはやゝ発達後消滅し。Bは最初の日より3日間停滞して後発達して北東に移行して主 Storm となり、Cは初めから発達した主 Storm であつたが南下して衰弱し、Dは間もなく消滅してしまつた。此の様な一見気儘な消長の中にどの様な法則を見



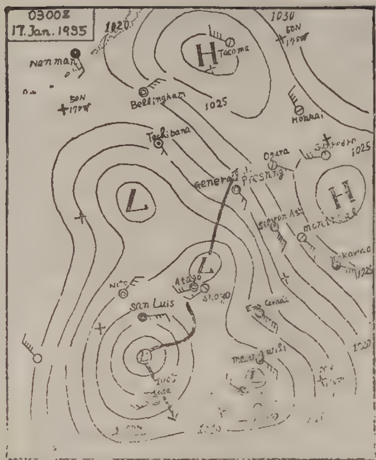
第 7 図　Montreal 丸（船長今泉大六氏）が遭遇した Kona Storm 内での気象の変化



第8図　24時間内の空気の移動量をマイルで表はし、数字は Max よりの偏差を示す（Simpson）



第9図　24時間雨量を吋で表はし、数字は Max よりの偏差す示す 100＝1吋（Simpson）



第 10 図　0300Z 17 Jan 1935

出すか。又此の様な現象が何故に起るか。之等の解明も今後の問題の一つであろう。

此の小文は戦前当台に送られた船舶気象報告を基にして調査したものを骨子としてまとめ上げたものであるが、今後の更に詳細な研究は将来船舶の増加と、熱心な当事者の協力による、正確な観測報告の増加に期待がかけられる。

§ 8 摘　　要

1. 発生原因は主として(1)閉塞低気圧から発生するものと、(2)上層に原因を持つもの、(3)熱帯性のもの(4)不連続線上がに発生するもの等考えられている。
2. 全発生数の約90%は1～4・9～12月の間に発生する。
3. 主な発生地域は15°N—35°N、145°W—165°Wの地域である。
4. 進行経路は顕著な蛇行性を示す。
5. 風力は10～11止まりで、中心より可成離れた所に強風帯が存在する。

域内の雲は不安定性の雲が多く、スコール性の雨が多い。

中心気圧は 1000mb 前后のものが多い。

（調査課　山本技官）

TROPICAL STORM

Hushed is the earth, the world all silent lies,
No waving palms, no twittering birds perform,
Th' oppressive air, the dark and angry skies,
Dull throbbing temples; all, await the storm.

From cloud to cloud the lightning streaks between,
The rumbling thunder, now approaching fast,
The mighty roar of waters, yet unseen,
Herald the coming of the storm, at last.

And now the fury of the tempest breaks,
A thousand angry gods their vengeance seek,
Thick swirling mist the earth obliterates,
And stars no longer do their vigil keep.
But morn, a cool refreshing breeze will bring
When birds, their loud and grateful anthem sing.

DOROTHY M. BENZIES

(Weather Feb., 1955, Vol. X No. 2)

日本及びその周辺の気象概況　昭和30年7月

On the Summary of the Meteorologioal Conditions in the Neighbourhood of Japan in July, 1955

昭和30年7月の本邦及びその周辺である東亜地区と西太平洋の気象概況は次のとおりである。

§1　日本附近の気象概況

本月上旬は前月に引続いて梅雨前線が本邦附近に停滞して梅雨模様を呈していた。

即ち6月下旬、一旦北上していた梅雨前線も29日より7月1日にかけてやゝ南下し本邦に沿つて停滞したが、2日、3日には再び日本海に北上、本邦は一時北太平洋高気圧に掩われ晴天を見た。4日～9日の間は再び前線が日本海沿岸乃至は瀬戸内海附近にまで南下して、ぐづついた天気となつた。然し、この梅雨前線も10日には日本海北部にまで北上し、本邦の梅雨には全く終止符が打たれた。

その後、本邦附近一帯は優勢な北太平洋高気圧圏内に入り、完全な夏型の気圧配置となつた。然し、梅雨明けと同時に才7号台風を魁として本月中に才13号まで7個の台風が相次いで発生し、いづれも本邦附近に接近した。

§2　低　気　圧

本月上旬は前述の如く梅雨前線が本邦附近に停滞し、この線上に時折小低気圧の発生が見られたが、いづれも弱かつた。中旬以後は日本附近には低気圧の発生が殆どみられなかつた。本月低気圧発生をみた区域は、主として、シベリヤ大陸、カムチヤツカ方面のやゝ高緯度地方のみであるが、その勢力は前月に比べて更に弱まつている。

台風　本邦南方洋上及び東支那海において才7号より才13号まで7個の台風が発生しているが、才7号台風を除いては、いづれもC級に属する小台風であつた。7号は中華に侵入したが、他の弱小台風は本邦附近に接近はしたが劣勢であつたので被害は殆どなかつた。この群生台風については既に本誌才3号に「昭和30年7月群発台風速報」として紹介されているので、御参照願いたい。以下、各海域別に低気圧の動静を述べる。

黄海及び日本海附近

本月、同海域附近では、上旬には梅雨前線上に時折小低気圧の発生をみたが、いづれも一時的な弱いもので、中旬以後は梅雨前線も解消し低気圧の発生は殆どみられなかつた。

東支那海及び本邦南方洋上附近

低気圧の発生は殆どなかつたが、先にも述べたとおり台風発生は、7個を算え、同海域をにぎわゝせた。

本邦東方洋上附近

低気圧発生はなかつたが、本邦南方洋上で発生した才9、10、11号の3個の台風が相次いで本海域に進入、東進してアリユーシヤン方面に去つたが、いづれも弱いものであつた。

オホーツク海及び千島附近

低気圧発生はないが、シベリヤ大陸発生のものが数個通過している。その内、オホーツク海中部で中心示度982mb（25日）を示したものが最低であるが、冬季みられるような烈風は伴なつていない。

カムチヤツカ及びアリユーシヤン列島附近

4日、カムチヤツカ半島附近で発生した低気圧があり、ベーリング海を北東進している。又23日頃シベリヤ大陸で発生したもの、及び台風才10号等が同海域に到達しているが、いづれもその勢力は弱いものである。

本邦及びその周辺附近を通じて7、8月の盛夏においては温帯低気圧の発達は1年を通じて最も弱く、此の季節に警戒しなければならないのは何といつても台風である。

§3　稍顕著なる低気圧 *

I、7月3日—7日の低気圧

7月3日頃、アムール河下口附近で発生し樺太を横

* 台風については既に「台風速報」が紹介されているので割愛した。

断して4日9時には樺太東方洋上 49°N、147°E附近に達して中心示度986mbを示し、最盛期をむかへ、その後漸次衰えつゝ6日には衰弱してオホーツク海北部に達した。

Ⅱ、7月23日—31日の低気圧

7月23日頃、アムール河中流域で発生し、24日夜樺太北部を横断して東進し、25日9時オホーツク海中部52°N、148°E附近に達して中心示度 982mb を示し、その最盛期に達したが、26日9時カムチヤツカ半島南端附近に達する頃には衰弱して990mbとなつた。25日午后より26日にかけて中心より東にのびる前線附近（及びその線上の小低気圧附近）では広範囲な濃霧の発生をみている。26日以後徐々に衰弱し、やゝ不規則な進路をとりベーリング海西部に入つた。

昭和30年7月における低気圧経路図は第1図である。

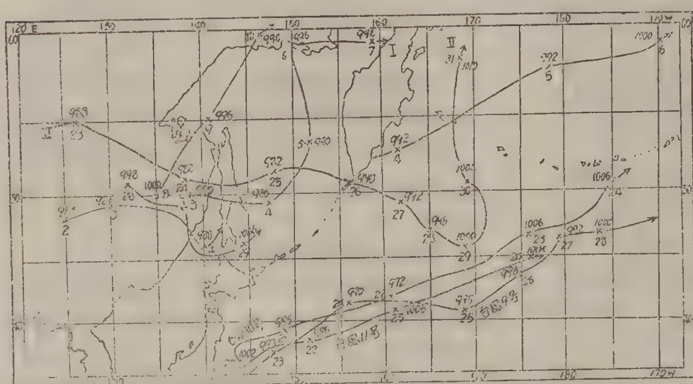
§4 各船舶からの海上気象報告

本月中に各船舶より神戸海洋気象台へ寄せられた船舶気象報告は、台湾航路2通、北米航路6通、南方航路15通、南太平洋航路1通の計24通であつた。

台湾航路で観測された最低気圧は、新興丸の1005.0mb（18日）、最大風力は同船のSW5（7日）、北米航路では最低気圧を、高昌丸が994.8mb（21日）、最大風力を同船がSW8（25日）、南方航路では最低気圧を明天丸が996.0mb（19日）、最大風力をぱなま丸がSSW7（19日）、明天丸がN7（19日）、辰宮丸がSW7（24日）南太平洋航路では最低気圧を乾瑞丸が1007.5mb（1日）、最大風力を同船がE2（1日）と、それぞれ観測している。

才1表に本月中に観測された暴風観測表（風力8以上）を、才2表に各船舶の最低気圧及び最大風力の観測表を示すと共に、貴重な観測資料を御提出願つた各船舶に対して深く感謝の意を表します。

（三宅技官）



第1図 昭和30年7月低気圧、台風の経路図（1000mb以下のもの）

才1表　　暴風観測表（1955年7月）　（時刻はG.M.T）

船名	暴風		最強風		位置		最低気圧		暴風	
	始日	風向	風向風力	日 時	緯度	経度	気圧	日 時	終日	風向
高昌丸	25	SW	SW 8	25 03	36.3N	146.0E	1006.0	25 03	25	SW

世界で最も寒い所

我々は長い間地球上最も寒い所はシベリヤのVerkhoyansk（67°33′N、133°23′E、海抜122m）でそこで1892年2月に測定した−69.8°Cを地上の最低気温の極と考えて来た。所がその後のロシヤの文献によると Oymekon（旧名Oymekon-Tomton、新名 Oymekon 又は Oymeyakon 63°28′N 142°45′E 海抜 800m 旧位置よりMW20哩）にとつて変つたようである。1938年 Tikhomirov によると Verkhoyansk と Oymekon-Tomtor（資料1930〜33年の4年間だけ）の気温を比較しているが後者の方が一年中を通じて低くなつている。1933年2月にはかつた Oymekon の最低の極−67.7°C を Tikhomirov は採用している。勿論両者の値については人によつて色々と異論はあるが少くとも1946年までは地面附近で測定した最低気温の極はこの程度の値と見るべきであろう。

（Weather. Dec. 1952）

各船舶からの海上氣象報告 (1955年7月)

第2表　Reports of Ships' Weather Observations. (July 1955)　時刻 G.M.T.

船名	会社名	船長	担当者	航路 自～至	航海期間 1955年	最低気圧	その時の風向	その時の力	観測日時	観測位置 緯度	観測位置 経度	最大風力 風向	最大風力 力	その時の気圧	観測日時	観測位置 緯度	観測位置 経度
新興丸	関西汽船	清家 侃	赤瀬多喜雄	門司～基隆	7～9	1006.5	SW	5	7. 18	32.1N	127.6E	同	左				
新興丸	〃	〃	〃	基隆～名古屋	18～21	1005.0	ENE	4	18. 12	26.3N	122.7E	同	左				
向日丸	大同海運	花田 広務	中 昭男	浦賀～Tacoma	1～2	1018.6	SW	4	1. 00	49.4N	144.6W	同	左				
向日丸	〃	〃	〃	Tacoma～東京	11～25	998.6	SW	4	19. 18	42.7N	165.8E	SW	7	1009.2	24. 18	36.0N	148.4E
あめりか丸	大阪商船	田島 信生	航海士	ロスアンゼルス～横浜	5～10	1012.0	ESE	4	8. 06	41.5N	155.7E	SSW	5	1014.0	6. 18	43.5N	166.2E
乾洋丸	乾汽船	小野 健	大綱 正司	ロングビユウ～名古屋	9～14	1010.0	SSW	5	12. 06	44.0N	157.3E	WSW	6	1011.5	12. 21	42.8N	153.2E
高昌丸	大同海運	谷本 只一	航海士	ケチカン～東京	12～25	994.8	SSE	5	21. 15	42.2N	159.8E	SW	8	1006.0	25. 03	36.3N	146.0E
明徳丸	明治海運	川村原 吉	航海士	パナマ～神戸	29～31	1023.0	E	3	31. 15	30.2N	173.2W	ESE	4	1028.0	29. 03	30.2N	159.8W
乾栄丸	乾汽船	新藤 光造	航海士	東京～セブ	3～7	1008.5	ESE	2	6. 09	17.8N	127.1E	ESE	3	1009.0	6. 18	16.6N	126.3E
乾栄丸	〃	〃	〃	ブツアン～東京	21～26	1008.0	SW	4	24. 09	25.2N	131.7E	SW	4	1009.5	24. 15	26.0N	132.0E
大郁丸	大阪商船	伊藤 喜栄	野村 裕男	シンガポール～神戸	9～18	1002.3	S	3	14. 18	19.1N	120.9E	NE	4	1005.5	18. 18	28.0N	130.1E
明天丸	明治海運	上杉 春三	江上 竜夫	ブツアン～大阪	7～10	1007.0	ENE	4	9. 06	18.9N	128.6E	同	左				
ぱなま丸	大阪商船	小島 信	巻島 勇	Sandakan～名古屋	14～19	1001.0	NNW	6	19. 21	31.8N	134.8E	SSW	7	1005.0	19. 17	30.8N	134.7E
明天丸	明治海運	上杉 春三	江上 竜夫	東京～Cagayan	18～21	996.0	N	7	19. 21	29.9N	134.7E	同	左				
辰宮丸	新日本汽船	藤田 正夫	航海士	ビスリーグ～名古屋	13～18	1003.5	SSW	3	13. 06	9.3N	126.8E	ENE	6	1007.0	18. 09	32.0N	135.1E
ジヤカルタ丸	東京船舶	南迫 倉治	太田垣勝三	香港～ジヤカルタ	2～6	1004.5	SSE	3	4. 09	16.1N	110.9E	SW	4	1007.0	6. 03	9.5N	110.0E
ジヤカルタ丸	〃	〃	〃	ビンタン～神戸	30～31	1009.5	E	3	30. 21	12.4N	113.0E	同	左				
靖川丸	川崎汽船	福沢 等	堀 卓美	シンガポール～尼崎	24～31	1009.0	SW	4	27. 06	9.9N	111.1E	SW	4	1011.2	28. 00	11.7N	113.0E
乾隆丸	乾汽船	馬越 英機	佐藤 新造	大阪～バラナカン	27～31	1009.0	S	3	27. 18	28.8N	129.5E	S	5	1009.5	27. 06	29.6N	130.9E
辰宮丸	新日本汽船	藤田 正夫	航海士	清水～セブ	23～29	998.0	SW	6	24. 21	31.5N	136.2E	SW	7	1000.5	24. 03	31.2N	136.0E
吾妻山丸	三井船舶	小野 豊	航海士	シンガポール～香港	9～10	1003.0	SSW	4	10. 18	20.0N	114.2E	同	左				
吾妻山丸	〃	〃	〃	香港～横浜	15～16	999.3	SSE	2	15. 18	25.4N	124.6E	SSE	5	1003.5	16. 15	28.3N	128.1E
乾坤丸	乾汽船	尾崎 重	田辺 直喜	名古屋～ズングン	29～31	1011.0	SW	3	29. 15	31.8N	135.4E	同	左				
乾瑞丸	乾汽船	川井 源一	坂田 博	神戸～ヌメア	1～3	1007.5	E	2	1. 06	7.5N	147.1E	同	左				
さんとす丸	大阪商船	神沢 彪一	航海士	神戸～ブエノスアイレス	1月29～2月12	999.0	SW	7	30. 00	35.7N	150.8E	NE	10	1021.0	8. 06	39.9N	148.2W
和光丸	三光汽船	岡村熊治郎	沢村富喜男	神戸～ローレンコマルケス	2月4～3月2	1008.0	E	5	1. 00	26.0S	43.8E	ENE	6	1021.0	11. 06	21.2N	113.5E
乾国丸	乾汽船	杉野 峯丸	航海士	大阪～シンガーポール	5月8～11	1005.5	SSW	2	10. 09	18.6N	118.9E	SW	4	1009.5	8. 12	23.9N	125.7E
国川丸	川崎汽船	児島末治郎	藤田 市郎	ロスアンゼルス～横浜	5月3～8	1009.0	E	3	8. 06	34.2N	146.8E	SSW	7	1027.0	3. 00	34.1N	177.8W
国川丸	〃	〃	〃	横浜～サンフランシスコ	5月27～31	1009.2	NW	6	28. 15	38.8N	147.0E	同	左				
あすとりあ丸	三菱海運	川村 忠司	加藤 重喜	日本～北米	5月22～6月9	1006.0	SW	4	8. 15	14.6N	96.5W	W	7	1003.0	9. 03	13.0N	93.5W
武庫春丸	新日本汽船	山口 繁雄	速水 正夫	横浜～ロスアンゼルス	5月25～6月3	990.0	WNW	5	28. 09	44.6N	167.6E	W	7	997.5	29. 03	45.9N	173.6E
さばん丸	乾汽船	帯田 久男	浜部 秀一	大阪～ラスタヌラ	6月9～16	1002.0	SSW	4	10. 21	23.3N	126.2E	SW	5	1003.0	12. 06	19.3N	120.4E
阿蘇春丸	新日本汽船	木場 武夫	航海士	横浜～ロスアンゼルス	6月7～11	1003.5	SSE	6	10. 15	41.2N	172.0E	S	6	1007.0	10. 03	40.4N	168.3E

The Kōbe Marine Observatory

Journal of Oceanography

2nd Series Vol. 6 No. 6

CONTENTS

Published by

THE KŌBE MARINE OBSERVATORY